１_男女共同参画社会推進懇話会の皆さんが壇上に並び、会場にいる全員と男女共同参画都市宣言文を堂々と読み上げる。２_住民有志による寸劇「鼻ぐり井手物語」。約400年前にはすでに男女共同参画があったという一場面。お互いに協力していこうと握手を交わした。３_男女共同参画推進標語で最優秀賞を受賞した東好里子さん。その他10人が表彰された。４_実体験をもとに男女共同参画社会について熱く語る講師の中嶋玲子さん。

菊陽町男女共同参画宣言都市記念式典

～ともに　歩むまち　きくよう～

菊陽町男女共同参画都市宣言

阿蘇の連山を眺望し、清流白川が流れる豊かな自然の中で生きるわたしたちは、歴史と文化を育み、男女がともに歩み、一人ひとりの未来が輝くまちを実現するため、ここに「男女共同参画都市」を宣言します。

一、わたしたちは、男女がお互いの人権を尊重し、個性と能力が発揮できるまちをつくります。

一、わたしたちは、社会のあらゆる分野において、男女が平等に参画できるまちをつくります。

一、わたしたちは、家庭・地域・職場で、男女が対等なパートナーとして、ともに幸せを実感できる社会をつくります。

「菊陽町男女共同参画宣言都市記念式典」は1月28日、菊陽町図書館ホールで行われ、多くの人が参加しました。フルートアンサンブルマザーズのオープニングで始まり、寸劇「鼻ぐり井手物語」では、先人たちが男女ともに認め合い、力を合わせて鼻ぐり井手を完成させた物語を披露しました。

記念式典では、町長あいさつ、来賓祝辞、標語の表彰式など、全てが男女共同参画について考えるきっかけを与えました。

記念講演では、元福岡県杷木町長の中嶋玲子さんが「世代をこえ　性別をこえ　ともに生きる」と題した講演をしました。中嶋さんは時折笑いを交えながらも、「男だから、女だからという思い込みだけで物事を判断しないこと。これからは、老若男女が力を合わせて頑張らないと成り立たない社会になっているのです」と熱く語られました。

また、会場にいる全員が一体となって、男女共同参画都市宣言文を読み上げました。一人一人が男女共同参画社会の実現に向けてあらためて考えた式典となりました。

特集

ともに歩む幸せのみち。

私たちは一人一人に個性があり、能力があります。それは、「男性だから、女性だから」という理由だけで制限されるべきものではありません。さまざまな社会問題を抱え、従来の価値観や社会の仕組みの見直しが迫られている現代、男女が「その人らしさ」を認め合い、協力し合える社会の実現が必要不可欠になっています。今回は、男女共同参画社会への理解を深め、「幸せのみち」を探してみます。

男女がともに歩む

「男女共同参画社会」という言葉を聞くと、何か難しそうだと思ってしまうかもしれません。男女共同参画社会とは、共に支え合い、認め合い、喜びも責任も分かち合える社会のことです。それは、家庭や地域、職場などのあらゆる場面で、性別などに関係なく全ての人が自分の意志で参画すること。難しい話ではありません。

男女共同参画社会は、男らしさ、女らしさを否定するものではなく、「その人らしさ」を認め、協力し合って前進していくことが理念です。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という昔からの慣習が、いまだに残っています。しかし、本格的な人口減少、少子高齢化、社会経済情勢などの問題を抱える今、その問題を解決するためには、より多くの女性が社会に参画していくことが求められています。

このような時代の変化に合わせ、より良い男女共同参画社会をつくっていくために、町では「菊陽町男女共同参画都市宣言」を行いました。

女性の社会参画への期待

現在、各分野で指導的地位に立つ女性の割合は緩やかに増加しているものの、国際的に見ても日本は低い水準にとどまっています。そこで国は、2020年までに、指導的地位に女性が占める割合を30％程度になるように期待する「2020年30％」の目標を設定しました。

日本の女性の労働力率の現状を見ると、30歳代を底とした、いわゆるM字カーブを描いています。女性は20歳代から40歳代まで、社会に出て自分を磨くことができる時期に、結婚や出産、子育て期が重なり、仕事を中断することが多いことが分かります。

しかし、女性が社会に参画することで、▼労働力の増加▼新たな需要の創造、掘り起こし▼女性の視点で新しい価値がもたらされる▼所得の増加・消費の拡大▼税・社会保障の担い手の増加などにつながると期待されています。

そこで、早くに出産し、育児を頑張りながら社会復帰を目指している宮田透さんの妻・宮田裕子さん(杉並台)に話を聞きました。

育児も社会復帰も目標

昨年９月に息子が生まれ、今は育児休暇を取っています。出産をしてからは、子育ても家事も完璧にしないといけないと思っていて、産後うつのような状態になった時期もありました。でもそんな時、夫が「いつも頑張ってるもんね」と言ってくれたり、「笑ってないとだめだよ」と声を掛けてくれたりしたことが、とても支えになり、安心することができました。息子のことで心配なことがあっても、一緒に考えてくれます。年上だし、しっかりしていて、とても頼りがいがある夫です。

いつも仕事を遅くまで頑張ってくれている夫のために、おいしい料理を食べてもらいたいと思い、料理本を見たり母のまねをしたりして作っています。夫が「おいしい、幸せ。ありがとう」と言ってくれるときが、一番幸せを感じます。

育児休暇が終わったら職場に復帰しようと思っています。いろいろな経験を積みたいし、少しでも家計の手助けになればと思います。でもそれまでは、精いっぱい息子をかわいがってあげたいです。これからも、夫婦で協力し合っていきたいです。

妻

宮田　裕子（みやた　ゆうこ）さん(24)(杉並台)

［職業］介護職(パート)
４月で結婚丸２年。今は育児休暇を取り、家庭で５カ月の息子・碧斗（あおと）くんを育てる。

男性にとっての家庭参画

日本の自殺者数の約７割は男性で、特に働き盛りの年代である40歳代から60歳代が多くなっています。これは、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という意識から、「男だから働いて家族を養わなければならない」という思いと、「家庭も大事にしたい」という責任感が要因の一つにあるのではないでしょうか。

日本の男性の家事や育児に費やす時間は、国際的に見ても最低の水準です。内閣府の調査では、家庭生活を大事にしたいと思いながらも、実際には仕事を優先しなければならないと答える人が多くいました。しかし、厚生労働省の調査によると、夫の休日の家事や育児の時間が長くなるほど、第２子以降が生まれる割合も高くなる傾向にあることが分かっています。男性の家庭参画が進むことは、男性と女性の両方にとって多様な生き方を選択できることにつながります。

そこで、仕事を頑張りながら家族を支える宮田裕子さんの夫・宮田透さん(杉並台)に話を聞きました。

家族一緒の時間が幸せ

仕事は飲食店で調理師をしています。朝９時から夜10時くらいまでの仕事なので、帰った頃には息子が寝てしまっています。ですから、休憩時間は家に帰り、少しでも遊んであげています。仕事から帰ると、妻がお風呂とご飯を用意してくれています。妻のおいしいご飯を食べ、息子の顔を見られる時間が一番幸せです。仕事は大変だけど、家族のために頑張らなければと思いますね。

休日は３人で出掛けます。今は子どもの服などを見るのが楽しくて、子ども用品の店に行ったり、お互いの実家に行ったりして過ごしています。普段妻に家庭を任せている分、自分がご飯を作ることもあります。休日は自分のことよりも、妻と息子と一緒に過ごしてあげたいと思っています。今は仕事にかける時間が多いので、妻を少しでも支えるためにも、もっと家庭にも時間をかけていきたいと思います。

妻には家にいてほしいという思いもありますが、働きたいという思いも大事にしたいし、正直、家計的にも助かるので、応援したいと思っています。これからも、お互いに支え合っていきたいですね。

夫

宮田　透（みやた　とおる）さん(30)(杉並台)

［職業］調理師
妻と息子と３人暮らし。週６日仕事をしながら家族を支える。

講演で中嶋玲子さんは言いました。「男性は、女性の力を信じてください。頑張っている人を認めて、その能力を掘り起こしてください。そして女性は、『私で良ければ頑張ります』と自分の力を信じてみてください」と。お互いを認め合い信じることが、男女共同参画社会のきっかけになるのでしょう。

社会参画・家庭参画といっても、一人ですぐにできるものではありません。まず、身近な家庭環境を振り返ってみませんか。「仕事か家庭どちらかに偏りすぎていないだろうか」「もっと支え合える方法はないだろうか」―。お互いにお互いを思いやることはとても大切なことなのです。

取材を受けてくれた宮田さん夫妻は、今は仕事と家庭への偏りがありますが、それを補うほど、お互いを思いやる心を持っていました。妻は夫のために、夫は妻のためにできることをしてあげたい―。一緒にご飯を食べること、子どもと遊んであげること、家族で出かけること、お互いを思いやる全ての行動が「幸せのみち」を歩むことなのだと思います。

特集　ともに歩む幸せのみち。終

菊陽町
男女共同参画社会
推進懇話会会長
那須　眞理子（なす　まりこ）さん

昔は「男女共同参画」という言葉もなく、家の中では男性の立場が上で、女性は仕事の他に家事、介護なども担っていました。しかし、今はお互いに思いやりの心を持って、フォローし合わなければ成り立たない時代を迎えています。男女共同参画推進標語で「『手伝おうか？』その一言に救われる」という作品がありましたが、男女共同参画は、まさにその一言に尽きると思いますね。
特に、女性が動かないことには何も変わりません。まずは自分自身を発信してみませんか。「男女共同参画社会なんて言葉あったね」といえる時代が来る日まで、勇気を持って社会に出て行くことも必要なのかもしれませんよ。